戸川幸夫動物文学全集 7

講談社

戸川幸夫動物文学全集7　諸国猟人譚ほか
昭和五十二年一月十八日　第一刷
昭和五十三年七月　四　日　第四刷
著者　戸川幸夫
装幀者　辻村益朗
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)　振替東京八―三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
定価　一九〇〇円
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします
©戸川幸夫　一九七七年　Printed in Japan

0393-443070-2253 (0)　(文2)

目次

諸国猟人譚　5
羆が出たア　187
名人伝造　209
天皇の一分間　223
ゴキブリの洋行　236
仁さんと豚犬　249
自由ケ丘の狐　268
毒蛇　279
カミサンと鼠　294
御用象騒動記　308
解説・尾崎秀樹　339

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

諸国猟人譚

第一話　夜這いの辰

一

夜這いの辰こと熊切辰次が僕を最初に訪ねてきたのは、僕が二十年賞与を貰ったばかりの時だったから、確か四、五年ほど前になる。

受付嬢はその珍妙な姓名――というより普通の人とはかなりかけ離れた変った印象に面喰らったらしかった。

九月の、まだ残暑の酷しい折で、上着なしの開襟シャツ組が多い中を、辰次はニッカーズボンに、ジャンパーを着て古ぼけたチロル・ハットをかぶったまま、のっそりと近代的にみがき立てられた会社玄関の受付口に立ったのである。

土建屋かと最初は見えた。陽に灼けた皮膚、顎には無精ったらしく伸ばした鬚、そして身の丈は五尺そこそこでがっしりとした身体つきだったからで、しかもそれも直ぐに間違っていたことが判った。

辰次は極めて訛りのひどい、聞きとれないほどの山形小国弁で、

「大熊さんに会いにきたんだがよス。俺、熊切辰次つう者だがなや」

と早口に喋った。

「はあ？」

受付嬢は眼をパチクリして聞き直した。二度目は最初より早口だった。三度訊ねることの非礼を思って受付嬢は面会票を差し出して、

「恐れ入りますが、ここのところにお名前を……それからここに面会される方の……」

と説明した。

辰次はギョロッとその大きな眼玉を光らせると野鄙な姿には似合わぬ達筆で被面会者――大熊堅太郎君、訪問者――熊切辰次、と書いた。

受付嬢は職業的に受話器を取り上げて、

「もしもし営業第一部の大熊さんに……」

と云いかけてぷっと吹き出し、その非礼に気づいて苦し気に笑いを押さえ、

「大熊さんに熊切さんが面会でございます……」

と辛うじて伝えた。

その時、僕は資料部から調査資料を持ち出して調べものをしていたところだったが、見習社員の一人から、

「熊切さんという方が面会です」

といわれても、最初のうちは一寸ピンと来なかった。
熊切といえば、もう二十年になるだろうか——山形県飯豊山の南小国村で知り合った猟師にそんな名の者がいたが、あれ以来、音信不通だし、それかといってそれ以外には思い当らなかった。
「はてね、ちょっと貸してごらん」
僕は見習社員から受話器を受けとると、
「どちらの熊切さんだね？」
と訊ねた。
受話器の向うで二、三喋る声がして、
「シャマガタの方だとおっしゃっています」
「シャマガタ？　山形だろう」
「とにかく訛りの強い方なので……」
「電話に出て貰ってくれないか」
するとがらがら声が取って代った。
「ああ、もスもス。大ぐまさんだかシ、俺、熊切よス」
「熊切……というと……あの小国の……」
「ンだ。ンだ。飯豊の辰次よ。夜這いの辰つぁんだスや」
ああ、やっぱりそうだったか、まだ生きていたんだ。懐かしさがぐうっとこみ上げてくると、
「なんだア、ほうかア。東京サ、いつ来たんだア？」
二十年ぶりに僕も下手な山形弁が出た。
「昨日よッ、昨日。小国から材木運んでよ。トラックひっ張って来たンだア」
「よし、今いぐ。待っててけろ」
僕はふた昔まえの学生になってあたふたと玄関に走った。
よく僕がこのK産業に働いてることを知ったもんだ。エレベーターの下るのがいつもより遅いようにすら覚えた。
玄関に降りてみると、辰次は来客用の椅子にも掛けずに、三人の受付嬢の顔を立ったまま臆面もなく真正面からまじまじと見据えていた。その様子は雪庇の上で勢子に追われて上ってくる獲物を見張っている時と同じように、僕に二十年前の記憶を鮮やかに甦らせてくれた。
「やあ、暫く……」
と僕は彼の背後から声をかけた。
「よくここが分ったねえ」
顔を合わせてみるとやっぱり僕は東京の人間だった。下手な山形弁は引っ込んでしまった。
辰次は左の眦から唇にかけてうっすらと残っている熊の爪痕と、その鋭い眼のきらめきを除いてはすっかり二十年前の彼と異なっていた。
野獣のような精悍さの代りに、豊富な体験と自信から身についたどっしりとした貫禄が備わっていた。くたびれたチロル・ハットの下から覗いている五分刈りの髪にも銀色の毛がかなり混じっていた。
二十年の歳月がやはりこんなところに翳を見せていた。
「やっぱり東京の大会社だなシ、いい女子ば置いてッこと

よス」

辰次が僕の顔を見たとたんに云った言葉はこれだった。

「辰さん、相変らずだね。雀百まで踊りを忘れずか、ハハハ……」

と僕は笑った。どこの会社でも受付嬢にはよい娘を置いている。わが社でもそうだったに違いないが、慣れてしまうとそう感じなくなっていただけで、辰次に云われて、ほんとうにそういえば三人とも美人だな、と見直したのであった。

ちょうど昼飯時であった。僕は辰次と一緒に食事することにして、何がいいね、と訊ねた。

「何だっていいス。山の猟師は何だって喰うから……」

僕は彼の嗜好を思い出そうとしたが、思い出せなかった。そこで有楽町の駅に近い喰べ物横丁の、とある天ぷら屋に連れていった。

昼ではあったが遠来の客の為に僕はビールを注文した。

ビールがくると、

「俺は駄目だス」

と辰次はごつい手でコップに蓋をした。

「そうだったけか？　昔は呑んだんでなかったかな」

「昔からよス……アルコールは一滴も駄目なんだ」

「あの方だけだったっけかなア。酔って熊突き槍もって村中を暴れ回ってたのを覚えてるような気がするが……」

やはり二十年の歳月は僕の記憶をいろいろにふみ迷わせているらしかった。

「ところでどうして分ったね、僕の居所が……」

仕方なく僕は自分のコップにだけビールを注ぎながら訊ねた。

「木村さんサ聞いたのよス」

「なるほど……そうか」

木村英吉というのは僕が山形に居た頃の友人で、確か僕より七つか、八つ年上の筈だった。

当時、僕はそこの高等学校の生徒だったが、クラスの者よりも町の人や山の人々と数多くつき合っていて、木村もその一人だった。

その頃、木村は山形市内で大きなパン屋を経営していた。僕が東京に帰るのと前後して彼もパン屋を廃業し、畜産業を見習うために北海道に渡った。現在は米沢市の郊外でささやかな牧場をやっている。

その木村が二、三年前に東京に出てきたことがあった。彼とは文通を続けていたので、早速僕を訪ねてきた。その晩は銀座を二人して呑み歩いた。酔えば二十年の昔に戻って懐旧の花を咲かせたのであった。

「それはそうと、あの猟師はどうしたろうな」

と僕は木村に訊ねた。

「夜這いの辰か？」

「ンだ、夜這いだ、夜這いの辰だちゃ」

「相変らず夜這いしてンべ。何しろ稀代の好き者だからな

シ。
去年の暮によう、俺、小国まで行ったもんで急に懐かしくなってよ、辰ンとこサ訪ねてみたのよ。そしたらよ、何だか知んねえけど多勢集まって酒呑んでんのよ。多分、猟師仲間だべ。
俺、入口ンとこで、おう夜這いの辰はいっか（いるか）と怒鳴ったら、若エ奴がとび出してきてよ、兄貴ンこと夜這いだなんて吐かしやがって……といきなりぶん殴ってくるのよ。俺も癪にさわって、何だ！　夜這いに〝夜這い〟と云ったってよかンベシタ、と取っ組んでッとよ、辰が出てきて若エ奴の襟がみ掴んで引摺り倒し、木村さんサ手を出す奴ぁ俺が承知しねえ……と怒鳴ったッけ、奴もいいとこあっさ。それから上げられて呑ませられて、とうとう泊っちまったけが……いやいや、奴もあの辺ではまンず大ボスというとこだな」
木村はそんなことを話した。
北海道から郷里の米沢に戻ってからも木村は辰次を友人の一人として、というより出入りの衆としていろいろ面倒を見てやっているらしかった。そこで辰次も恩を感じて、戦時中から戦後の食糧不足の折には山の獲物や山菜などをよく運んでくれたそうで、
「あいつも武士だ。ちゃんと仁義は心得てンのよ」
と木村は語っていた。
その木村に辰次を紹介したのはもともとは僕だったし、辰次と僕との出会いに至ってはまた奇妙なものだった。
昭和八、九年の頃であった。山形市内から正面に見える雁戸山の尾根に白く雪が訪れていたから晩秋か初冬であったろう。街はもう冷え冷えとした夜気に包まれていた。
山形市の目抜き通りにある旭座という劇場に「東京レビュー桜正夫一座」というのが掛かった。レビューあり、剣劇あり、手品あり、曲芸ありといった泥臭いドサ廻りの一座だったが、それでも座員は五十名近くもあってこの辺に来る劇団の中では豪華な方だった。
都会的な刺戟の少ないままにこんな時は高校生たちも街の人々に混じって多勢見物に出かけた。興行は三日間に亙ってうたれていた。僕は最初の二日は、あんなもの見たってつまらないと寮の部屋で寝転んで、寮生たちがガラガラと朴歯の下駄を響かせて出かけてゆくのを見送っていた。三日目は土曜日だった。僕は酒が呑みたくなって仲の良い友達の二、三を誘った。
が、彼らはいずれも、
「レビュー見にゆくよ」
と、誘いに乗らなかった。
一人呑むのもわびしくて僕は彼らにつき合った。その代りレビューがはねたら一杯やるんだぞ、と約束した。
レビューが終って僕は藤村、篠塚という二人の寮生と街角にある居酒屋に入った。
レビューの話を肴に暫く呑んでいると藤村が、眼顔で話

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

題を変えろと注意した。二人連れの客が入ってきたからだった。

ふり返って見るとその一人はいましがた舞台で見た座長の桜正夫に違いなかった。舞台で見たよりは少し老けて、でっぷり肥っていた。五十に近かったのかも知れない。鬢はかなり白かった。

二人は相当に酔っていて、大声で、酒をどんどん持ってこい、と注文した。

そのあたり構わぬものの云い方が僕の気持ちにごつんと響いた。フン、たかがドサ廻りの座長のくせに……。

僕らはお淋しかった。お互いがお互いの財布の中身を値ぶみし合っていたので、塩豆を肴にちびちびとやるしかなかったが、隣席では刺身や天ぷらや鍋物などを取り寄せて豪勢にやりはじめた。それも僕の癪に触った一つだったかも知れない。

そのうちしきりとこちらの様子を見ていた桜正夫は、つと立ち上がると、一つの折を持ってきて、

「学生さん、これ貰ったんだが、喰ってくれよ」

と僕らのテーブルにボンとほうり込むように置いた。

「やあ、どうも有難う。僕らお淋しいんでね」

篠塚がへへへ……と愛想笑いをして折に手を出した。

「待て……」

僕は篠塚の手を抑えると、

「俺たちゃあ乞食じゃないんだぜ」

「じゃあどうする？」

「突っ返せ！」

「そりゃあ悪いよ。向こうは親切で呉れたんだよ」

と藤村も云った。

「親切なら何でも貰うのか」

確かに僕は少し荒れていたと思う。

「だって……」

「何でもいい。返すんだ。お前が駄目なら俺が返してくる」

僕は折を掴むと桜正夫のテーブルに持っていった。

「折角だが、僕らは腹がくちいからお返しします」

すると桜正夫はくるくると眼を回して僕の顔を見上げた。外人のような青味がかった瞳だった。

「君たちが喰わなきゃ、寮に持ってってやれよ。誰か腹を空かした者がいるだろう」

「腹が空いてたって山高生は貰い物や余り物は喰わないさ」

「何だって……」

桜正夫は初めて僕の敵意を悟ったようだった。彼は僕が置いてきた折を掴むと再び僕たちのテーブルに近づいた。

「おい、書生さん。俺は親切で云ってんだぜ。お前さん方に喰べて貰やあ、寿司が無駄にもならないし……」

「ちょっと待った。それをあんたの方では親切と云うのかね。客に貰ったが腹はくちいし、持って歩くには邪魔にな

る。ちょうど腹の減ったような学生があそこにいる。やっちまえ……と犬にでも呉れるつもりで持ってきたんじゃないか」
「……」
「僕らが学生でなくて、ちゃんとネクタイをしめて立派な背広を着た紳士だったら、あんた、同じことをするかね。喰いなって突き出すかね。
僕らあ、いまはビイビイの書生で徳利の数を勘定して酒を呑んでるけど、皆んな将来を持ってるんだぜ。将来は大臣になるか、学者になるか、実業家になるか、教授になるかわからない身だ。それが、喰べて下さい、といわれて届けられたものならいざ知らず、今はじめて会った人間から喰えといわれて、へえ御馳走さまと云えますかね。
無駄になるのが心配なら近いとこだ。ここの姐ちゃんに楽屋まで届けさせたらいい。それこそ腹の減ったのが多勢いるだろう」
藤村と篠塚が、もう止せ、もう止せ、と何ども肘を引っ張るのを感じながらも僕は云いたいだけ喋った。
みるみる桜正夫の顔が真ッ赤になったと思ったら、
「勝手にしやがれッ！」
と寿司折を僕らのテーブルに叩きつけた。折が破れて寿司が飛び散り、徳利が二本転がり落ちた。女たちがアッと叫んで立ち上がった。当然、喧嘩になると思ったのだろう。
「姐ちゃん、酒二本」
と僕は奥に怒鳴った。
「その勘定はあっちから貰ってくれ、弁償だ」
どうしましょう、というふうに女中は女将の顔を見た。
「出しな。癪だが、奴の云う通りだ」
桜正夫が女将に声をかけた。桜正夫の客が長居は無用と、こそこそと帰ってゆくと、桜正夫は僕の方を見ながら暫く独酌でぐいぐいと呑んでいたが、やがてすっと立ち上るとまたやってきて、
「さっきゃあ俺の方が悪かったようだ。どうだね、一緒にやらないか」
桜正夫は僕の眼を見据えるようにして云った。
「ああ、ここのテーブルでならね」
僕は椅子をすすめた。それからどういう話をしたかもう今日では記憶がない。ただ、桜正夫が僕の顔を指差して、
「お前は面白い書生だ。その元気がなくっちゃいけねえ」
としきりに云ってたことは憶えている。こんなことが縁となって僕はその後、桜正夫と長くつき合った。年二回、彼は旭座に現われたがそのたんびに僕は木戸御免で楽屋に入りびたり、座長室でごろごろしていた。山形市内では学校の手前さすがに気がひけたが、米沢や新庄や鶴岡などにくッついていっては面白半分から旗持ちをして街回りもやった。だから彼は山形にくると必ず僕を呼んで遅くまで呑み歩き、
「お前の呑みつけのとこに行こうぜ」

と云った。行くと女将を掴まえて、
「こいつの借金はねえかね」
と訊いた。
「僕の義弟だよ。だから勘定は僕が払うからな、こいつから貰わねえでくれよ」
と触れ回った。そんなことで恩を着せられることが嫌さに僕は毎回現金払いをせざるを得なくなり、世間を狭めていったような気がした。
ところで話は前に戻るが、暫く飲んでいると桜正夫は、
「河岸を変えようじゃねえか」
といいだした。酔って巻き舌になっていた。
「いいね」
「どこへでもついてくるか？」
「うん」
「小姓町に行こう。嫌かね？」
そこは遊廓街であった。呑んだくれてはいたが、僕はまだ遊廓の味は知らなかったし、童貞でもあった。ぐっと咽喉もとに切先を突きつけられたような気持ちでうーんとつまった。
「行ったことないのかい？」
その眼が、僕を試して嗤っているようだった。
「あるさ。行こうぜ」
と僕は胸を張った。
「大熊、大丈夫か」
藤村が心配して云った。篠塚は篠塚で、僕が引っ張り出されて闇討ちでもされるんじゃないかと気を回して、
「僕も一緒に……」
と口を出すのを、
「俺、この大将と二人だけで飲み直してえんだよ」
と桜正夫は押えた。
自動車が呼ばれて、僕は桜正夫と車に乗り込んだ。ええい、どうにでもしろ！　後には退かれない——という気張った気持ちだった。
色街にしては殺風景な門燈が前方に見え出した時に、
「どちらサ、着けっかス？」
と運転手が訊ねた。
「お前の行きつけに行こう」
桜正夫は僕に云った。
「行き当りばったりさ。運ちゃん委せる」
と僕はごまかした。
「だば……新よしか、花村がいいス。どっちも一流でなシ。どっちかというと新よしがいいけんどあそこは早く閉めっからもう駄目だかすんねえ。花村だば妓の数も多いから……」
運転手はぶつぶつと独り言をいいながら大門をくぐった。
と——ヘッド・ライトの光芒の中できらッと閃くものがあった。

闇の中に着物の胸をはだけた二十五、六のやくざ風の男が突ったっていて、右手に二尺ほどの白刃を抜いていた。
「ひえッ！」
運転手は悲鳴を挙げてブレーキを踏んだ。僕は坐り直して桜正夫の横顔を見た。一座の若い者に待ち伏せさせやがったな、と思ったからだった。だがそのやくざ風の男は車のドアを外から開けると、
「桜正夫だな」
と叫んだ。
「そうだ」
「桜正夫なら降りろッ」
男は刀をびゅんと振った。
相手は僕ではなかったが、僕は気を呑まれて車から降りると棒のように突っ立ったまま二人の応対を見守った。運転手も同様だった。交番に知らせにゆく機転はこの際の彼にも僕にも浮かばなかった。
「用は何だッ」
桜正夫は恐ろしい声を出した。
「手前、この町で小屋を掛けやがって……」
と男は云った。
なぜ俺に仁義を切らねえ、と云いたいらしい。胸に巻いた晒の白さが闇に浮いていた。
「何を吐かしやがんでえ。俺あな、真ッとうな興行師だ。国家にちゃんと税金を納めて稼がして貰ってるんだ。国家以外に誰に、何の税金を納める必要があるんでえ」
と桜正夫は怒鳴った。
「そうは云わさねえ。この土地ゃあ、ちいっとばかり違うんだ。××サーカスの奴らが三人叩っ斬られたこたあ知ってるだろう」
「××サーカスや流行歌手の××××が手前たちに脅かされて大そうな銭を差し出したたあ聞いたが、桜正夫はそんな腰抜けたあ、わけが違う。さんざん火の中、水の中を潜ってきたんだ。手前もそのピカピカする物を持ってるンならお慰みに突くなり斬るなりしてみやあがれ、赤けえ血が出なかったら銭ゃあ要らねえ」
桜正夫はそういうと着物の双肌をパッと脱いで太鼓腹を男の前に突き出し、ぴちゃぴちゃと叩いた。
「さあ野郎、突くならここだ」
「……」
男がぐっと詰まってしまったのを見ると僕に漸く落ちつきが戻ってきた。僕はいきなり男の右腕にとびついた。男は抵抗もせず素直に僕に刀を渡し、
「親方、すんません」
と頭を下げた。
「そうだろう。手前は何だな？　本当は呑まして貰いてえんだろ」
「へえ……」
「じゃあ、最初からそう下手に云やあいいじゃねえか。つ

いてこい」

もうこうなると貫禄の違いだった。大変な奴だったんだな、急に僕には桜正夫が巨大に見えはじめた。こっちは力いっぱいタンカを切ったが、桜正夫にしてみりゃあ、可愛い奴だぐらいにしか感じていなかったに違いない。

僕ら三人は花村という遊廓に登った。女たちがぞろぞろと現われた。

桜正夫も、そのチンビラも、こんな場所には慣れていて上手に女たちをからかって笑わせていたが、僕には傍にべったりと坐った女たちが黴菌の巣のように思え呑む酒も美味くなかった。それでも時が経つとかなり酔ってしまった。

夜中の二時頃でもあったろう。席を外して女の部屋にしけこんでいた筈のチンビラのがなり立てる声が廊下で聞えたかと思うと、バタバタバタと駈けこんできて床の間に置いた仕込杖をひっ掴んで飛び出した。

「馬鹿野郎、隣りの嬶とする時みてえにすぐひっこ抜く気になりやがる。熊さん、ちょいと見てくれ、素人衆だったらやっぱり吃驚するからなア」

桜正夫に云われて僕が廊下に出た時、大きな音が階段の上から下に響いた。見るとチンビラの姿はなく手摺りに奴の仕込杖が切り込まれてぶらぶらと揺れ、その傍に背の低い、がっしりとした身体つきの二十七、八の男が朝顔模様の女郎の寝巻きを着こんでニヤニヤ笑っていた。

「チンボ出す場所で、刀だす慌てン坊も居ンだなア」

嗄れたような声音でその男は喋った。階段の下を見るとチンビラが蛙のように伸びていた。

「どうだね、一緒に遊ばないかね」

いつの間にきたのか、うしろで桜正夫の声がした。

「いいべなス」

その男が熊切辰次だった。

辰次は桜正夫に問われるままに飯豊山の猟師で、熊獲りにかけては俺あ名人で、あの一帯じゃあ俺の右に出る者はねえとぬけぬけと云った。

「どのくらい獲ったね、今までに……」

桜正夫が訊ねた。

「十五ン時が皮切りでよシ、十二年間に六十頭ぐらいかな」

「というと年に五頭か？　――なるほどそれなら大したもんだ。鉄砲は？」

「親ゆずりの村田よウ」

辰次は五十間（九十メートル）離れてひらひらと飛ぶ蝶を撃ち落とせると自慢した。僕は、それは奴のホラだと考えたが、桜正夫はしきりと感心していた。辰次の話だと、熊猟は――ことに春熊獲りは、数人の猟師たちが組んでやるのが慣例だった。射手が熊の通り道に待ち構え、そっちへ勢子が追い出してゆくのだが、辰次はその獲り方を嫌って、たいてい単独で山に入ると云った。

二人で獲れば獲物は山分け、三人で獲れば三等分――頭数が増せばそれだけ利益が少なくなるので、という意味もあったろうが、彼は他の猟師たちを小馬鹿にしているらしくそれで一緒にならなかったのかも知れない。

「お前ら足遅くてわがんねえ（駄目だ）」

というのが彼の口癖だが反駁できる猟師はないとも云った。彼の話が本当だとすると雪山十八里（七十二キロ）を一日で歩き、着のみ着のままで何日も雪の中に野宿できるのは猟師の中にもざらにいないに違いない。その意味で辰次はスーパーマンに違いなかった。それに加えて彼が――というより皆が、辰次と一緒したがらない理由があった。変り者で、乱暴で、その上ド助平ときていて、大ていの者のおっ嬶は娘時代に辰次に這いこまれた経験を持っていたからである。

僅かばかりの米と味噌を背負袋に入れて山に入ると、獲物が獲れるまで何日でも辰次は村に降りてこなかったし、熊が獲れればそれを担いで町に出た。

新潟や富山から業者たちが丸のままで熊を買いに来たが、辰次は売らなかった。そんな売り方が損なことを彼は百も知っていた。皮はなめして、胆は干して、脂は薬壜に詰めて、そして肉は自ら車や橇に乗せて売りに行く。その方が手間はかかったがはるかに儲けになった。

金を掴むとそのまま町の女郎屋に流連けてすってんてんにならなければ戻らなかった。

この時も、彼は村の栗林についた秋熊を仕留めたので山形市内まで売りにきて流連けしているのだと云った。

猟期でない夏場は彼は炭を焼いたり、小国の材木会社のトラック運転手になったりした。

山に雪がくると会社側がどんなに引き止めても彼はあっさり辞めて村に帰った。独り者の彼にはそういった渡り鳥のような生活をしても誰も何ともいう者もなかった。

「辰つぁん、お前さんの左頬の傷はどうしたんだね」

桜正夫は訊ねた。

「これかス、こりゃ熊と喧嘩してよ」

こともなげに辰次はいった。

「熊と格闘したのかね」

と僕は問い返した。

「ンだ。巨っきな奴でな」

「旨く急所に命中しなかったんだね」

すると辰次はギョロッと眼を光らせて、

「鉄砲で狙って、はずしたことはねえ」

「すると……？」

「こん時やあ、鉄砲、担ってなくて……」

「ほう、鉄砲なしで」

「ンだ、夜中よ。俺、初めは人だと思ったんだっけ、ふてえ失敗よ」

話というのはこうだった。山に近い太吉の家の娘ッ子のとこに夜這いに出かけたのが辰次の二十の秋だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.